
落花遊戯

蜂澤 漣介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落花遊戲

【Nコード】

N0627A

【作者名】

蜂澤 漣介

【あらすじ】

アキラ ユウジツ
白、夕星の二人の少年の別れ。流れる光に身を投ず。

「白、見てご覧」

軽々しいネオンの照らす蒼白い光に、夕星の頬が血の気を失って見えた。

「何、」

「人が蟻の様だよ」

下界を見る夕星の、石膏の肌に亀裂が美しく入った。
その淵の色は綻び始めた櫻色。

「簡単に潰れて仕舞いそうだね、」

彼の花瓶の様な脊の骨がゆたりとしなり、その右手が何かを拾おうと下に伸ばされる。

「駄目、だよ」

「解っているぞ」

繋げた彼の左手を固く握った。

「いくの？」

遙か足元を流れる光の筋をぼんやり眺めながら、緩められる指を感じながら、自分の心臓の音を聴いた。

「…そうだな。もう、此処には長く居過ぎた」

疲れたよ、と彼は軽く嘲笑って、黄金の髪を風に遊ばせた。

――瞬、月が糸になったのかと錯覚した。

「ぼくは、もうちょっと頑張ってみるよ」

「そうか、」

解かれた指に凍えながらも、何も言えない自分がどう仕様もなく無力だと思った。

「じゃあ、」

「うん、また」

莞爾微笑った夕星の軀がゆらりと傾いて、頭から萬有引力の法則で光の河の中へ、ゆっくりと、

引き合う地面と月、
沈む軀。

こ、とり

ちゃんと向こう岸迄着けたのでしょうか、

（後書き）

この二人の話はまた書きたい、
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627a/>

落花遊戯

2010年12月13日21時47分発行